



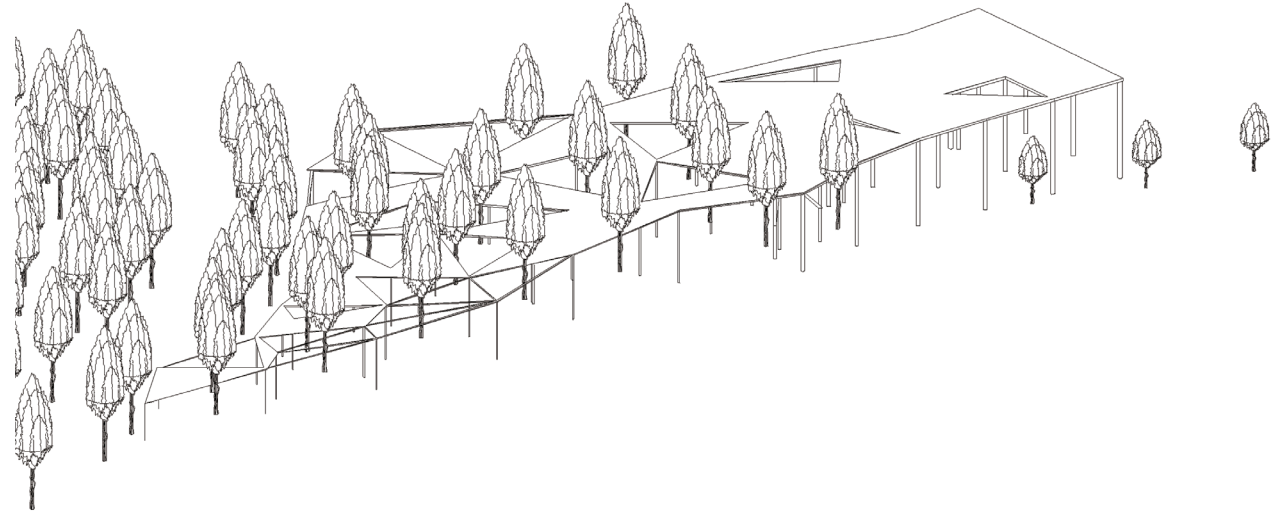
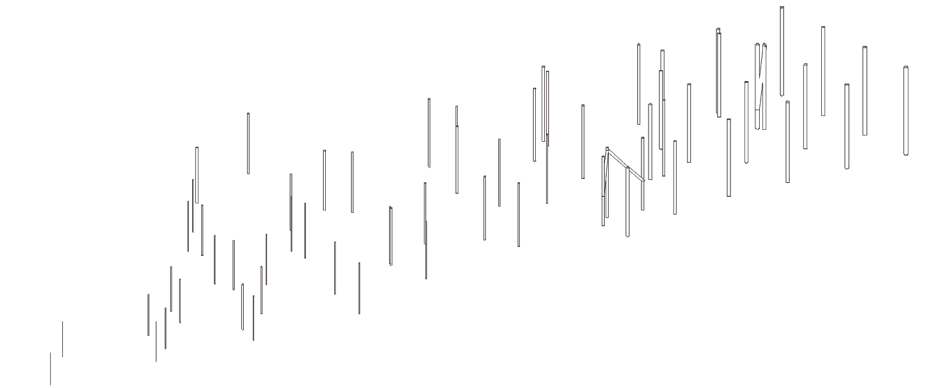
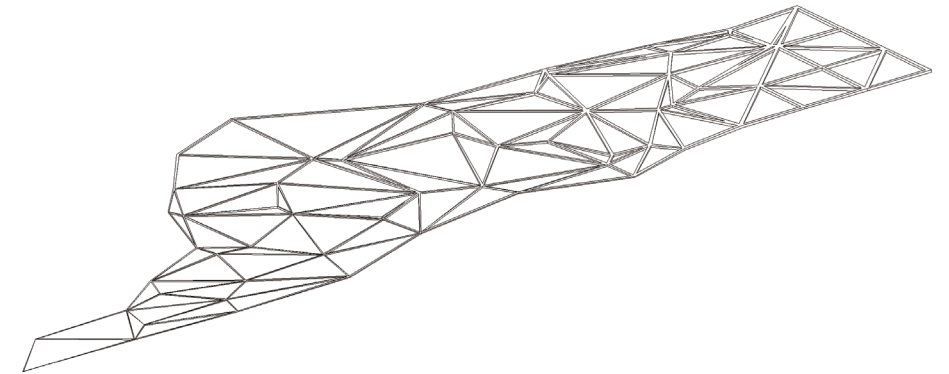
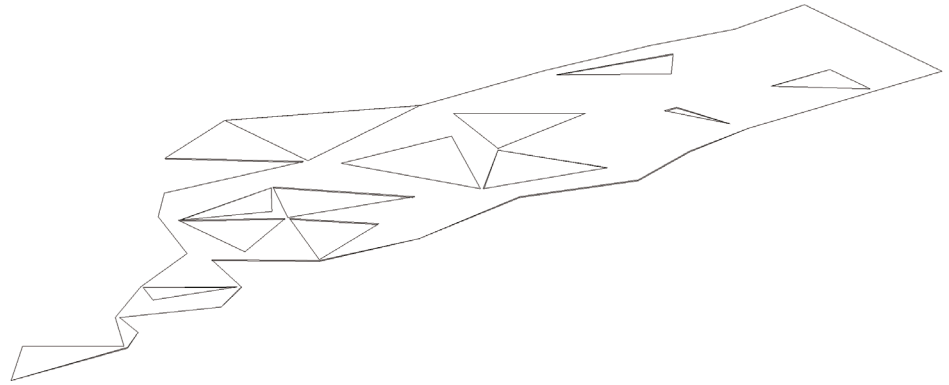


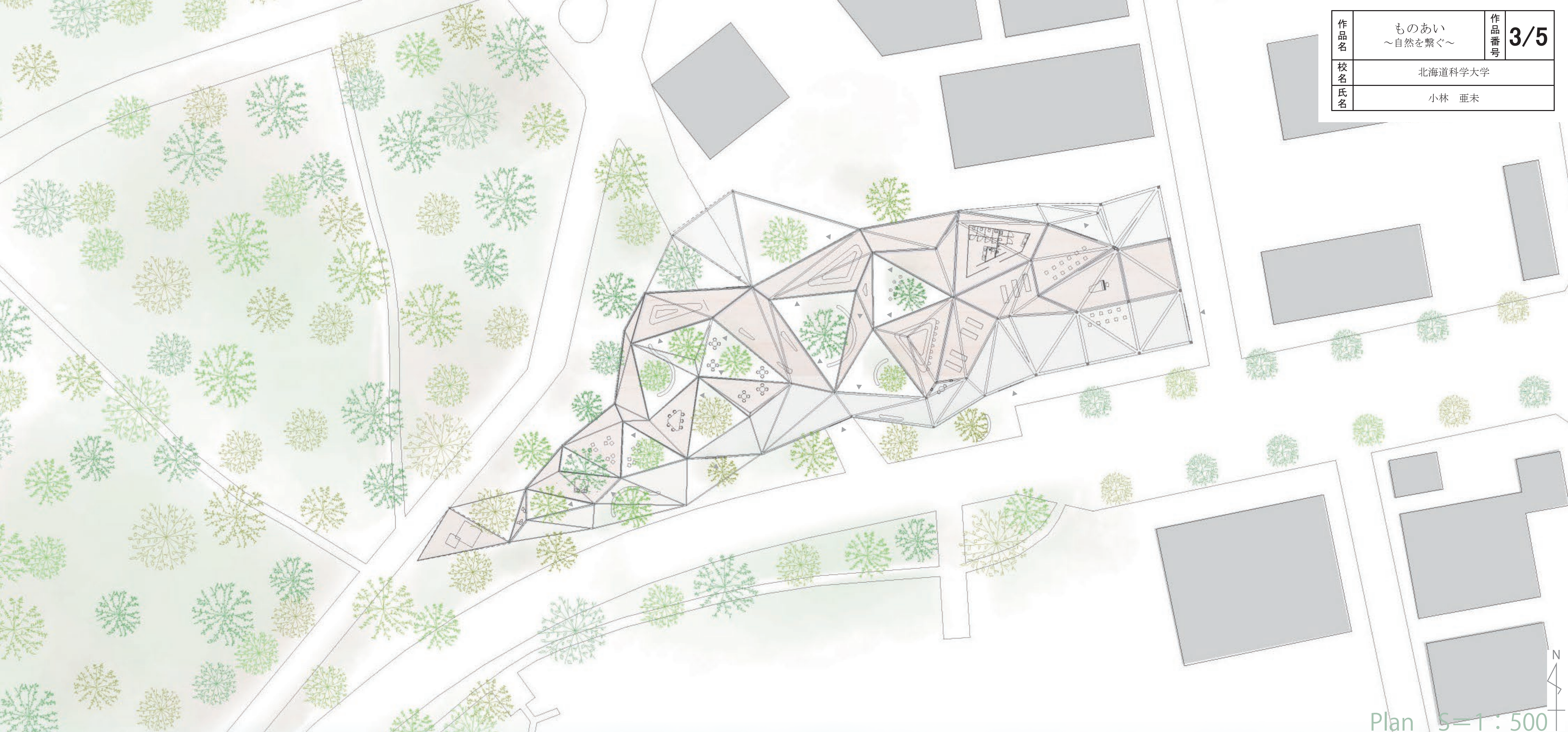
「自然」とは、曖昧で、定義し難いものである。例えば、「自然林」。これは、自然であると答える人が多いだろう。次に「木材」。これは、木という素材を使っているため自然である、人が加工したものであるから人工である、など捉え方は様々である。では、二次林や建築はどう捉えるのか。建築は人工物であるという意見が一般的であるが、人間を自然（野生）であるとするならば、建築も自然であると言えるだろう。また、樹木も空間を構成するという観点から、木も建築であると述べる事が可能である。原始林と札幌の中心部に隣接する丸山で本設計を行うことで、樹木と建築の境界、自然と人工の物間を提案する。

一般的な建築は、モジュールなどを用いることで、人間にとって合理的かつ快適な空間を作りだしてきた。一方で樹木は、人間の利用目的に沿って成長しているのではない。しかしながら、人間は木陰を利用したり、根元に腰かけたりして樹木を利用する。これは、人間が考え、自ら用途を発見しているといえる。

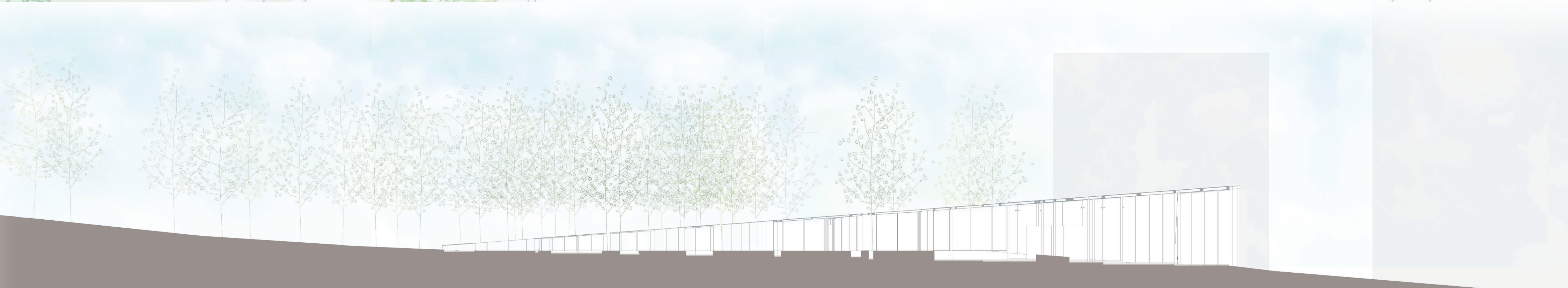
本設計では、既存の樹木と建築の関係を幾何学によって示した。柱は一見ランダムに配置されているように見えるが、樹木の配置により決定されている。樹木を線で結び（緑線：ドロネー図）、次に樹木の持つ領域（赤線：ボロノイ図）を示す。幾何学を用いて柱を配置することにより、柱は樹木の外心となる。それにより、「人間的スケール」と「人間が考えて利用するスケール」が交差する。これは、「人間」「建築」「樹木」新たな関係性を造り出し、新たな空間体験が生まれる。

市街地側からこの建築に入ったとき、天井の高さと奥行きを感じる。奥へと進んでいくと、徐々に樹々が現れ、さらに進むにつれ、天井が低くなり、開口から空と樹々を眺望することが可能である。一番奥まで進むと、そこは外であり、樹々のスケールの中に建築が溶け込む。これらの情景は、梁と屋根、そしてこの敷地の傾斜によるものである。森林側に行くにつれ、標高が高くなるとともに、屋天井が低くなる。また、梁や柱も細くなり、繊細になる。建築と樹木、どちらの存在も感じつつ、都市から森林へと向かうにつれ風景が変化する。



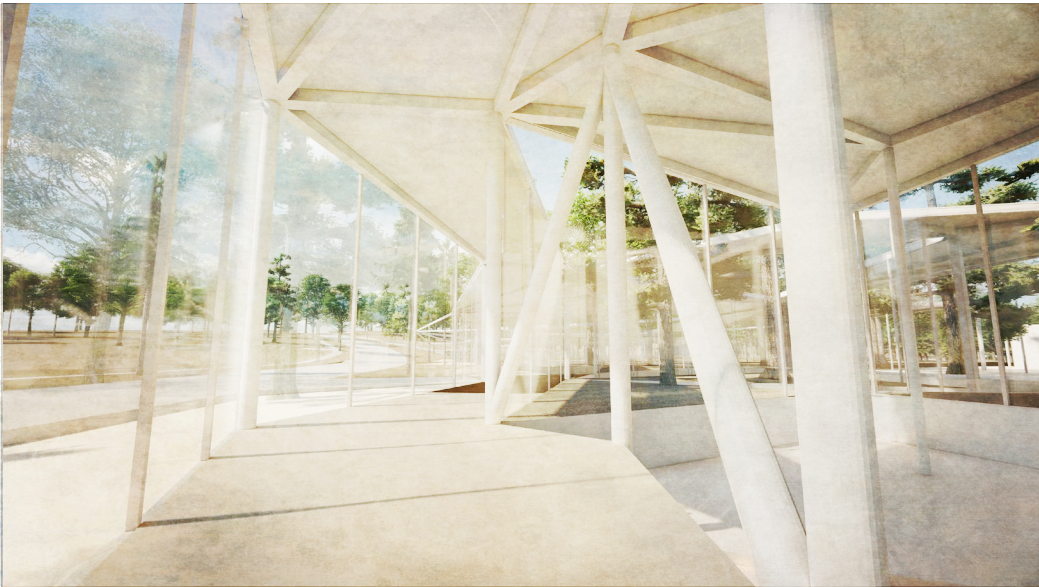


Plan S=1 : 500



South cross section S=1 : 500

この建築の床のテクスチャは、3種類である。1つ目は、中庭等の元の地盤である。2つ目は、三和土。三和土の場所は、散策路の延長であり、敷地の傾斜を引き継ぎつつ、建築内部も人工と自然を緩やかに結ぶ。3つ目は、木。ここでは人々が集い、出会い、そして語らう。さらに、敷地の傾斜と人間スケールの段差が交錯することにより、一部、建築内部が中庭に比べ低くなっている。「人間的スケール」と「自然のスケール」が織り交ざること、中庭が建築内部の視線を緩やかに区切り、半個室のような空間が生まれる。



市街地側

集いの空間（例：ホール）

市街地側は天井が高く、大空間が広がる。自然と市街地の間に人や文化が集まり、自然と人工を結ぶきっかけとなる。



原始林側

出会いの空間（例：マルシェ）

建築の中心部であり、人の行き交う場所である。物や人との新たな出会いや発見が生まれる。

語らいの空間（例：公園）

人との距離、空や樹々との距離が近くなり、自身の心との会話、友との会話、自然との対話する空間となる。

